006 西川鉄次郎

白虎隊から司法の道へ

出身地　福島県会津若松市（江戸生まれ）
生　年　一八五三（嘉永六）年十二月二十四日
没　年　一九三二（昭和七）年六月一日

幕末に生まれた創立者一八人のうちで、少年期に最も過酷な体験をしたのは西川鉄次郎だったのではないだろうか。

西川が、数え年で十六歳を迎えた一八六八（明治元）年に戊辰戦争が起こった。この年一月の京都鳥羽・伏見の戦いから翌年五月の箱館五稜郭の戦いまで、東日本を戦場に約一年半続いた内乱で最も激戦だったのが、幕末期に京都守護職を勤めた藩主松平容保率いる会津軍と、西南雄藩を主力とする明治新政府軍が激突した会津戦争であった。

この戦いの最中にあって、会津軍で十六、十七歳の少年から編制されたのが白虎隊であった。白虎隊の各部隊は、藩内の上士・中士・足軽の身分により、さらに士中・寄合組・足軽の三隊に区分されていた。

西川は、白虎隊の寄合組二番隊の隊士だったのである。

西川が加わったこの白虎隊寄合組二番隊に出陣命令が下ったのは、七月十二日のことであった。同月十五日に会津若松城を出た彼らは、八月に入って越後口で戦さに臨んだ。

しかし、会津の戦況が悪化したことで寄合組二番隊の隊士たちは八月中旬から徐々に退却を余儀なくされ、九月六日に至って会津若松城に入り、三の丸の守備に就いた。白虎隊士中二番隊の隊士二〇人が飯盛山で自刃するという悲劇が起こったのはこの間の八月二十三日のことである。

寄合組二番隊士たちは、必死に城を守りながら時に三の丸から出撃したが、奮戦虚しく九月二十二日会津軍は降伏し、翌日生き残った隊士五五人は、猪苗代で謹慎に入った。一説によれば、西川は越後口で幽閉生活を送ったともいわれている。彼らは、その後東京へ移送されたらしく、翌年会津松平家の家名が再興されるに及んで謹慎を解かれた。

幽閉の身から解放された西川は、七〇年斗南藩（旧会津藩）から静岡藩に留学し、沼津兵学校附属小学校の生徒となった。黒川正の回顧談によれば、他藩からの留学生の中には立派な身なりで時に羽目を外す者もいたが、西川は学資金が衣食をまかなうにも不足し、先生の家で居候したらしい。生活は苦しかったが、数学の才があって、同級生たちから重んじられていたという。

彼は一年足らずで沼津を離れ、七一年に上京して南校に入学する。翌年には、学資金が支給されることになり、開成学校予科生となった七四年には法学を志していた。この予科を卒業した後、本科に進みさらに法学を研鑽して、七八年晴れて東京大学法学部を卒業した。

西川鉄次郎

その後、西川は官吏となって外務省を皮切りに、内務から文部へと移り、英吉利法律学校の創設に参画した翌八六年、東京始審裁判所の判事となって司法への道に至る。九〇年以降は水戸の始審裁判所や地方裁判所の所長、大審院判事、東京控訴院部長、横浜裁判所長などを歴任している。こうして、裁判官としてのキャリアを積んだ西川は、一九〇二年函館控訴院長に、さらに四年後には長崎控訴院長となった。

当時、控訴院は全国に東京・大阪・宮城（仙台）・広島・名古屋・函館・長崎の七つしかなかった。旧会津藩出身の西川が、その長に就いたということは、同郷の山川浩（男爵）・山川健次郎（東京帝国大学総長）兄弟、柴五郎（陸軍大将）、出羽重遠（海軍大将）らと並んで、明治という時代においてはじつに破格の立身出世であったのである。

西川は、自らのことについて多くを語っていないが、司法の道を志したその根底には貧富や権力の有無に関わらず万人に等しく適用されるべき「法」の公正と正義の存在があり、それに己の全生涯をかけたのではないだろうか。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。